校長研修だより８８

サーチライト

２０２３・１・６　　重枝 一郎

あけましておめでとうございます。３学期もよろしくお願いします。

この「校長研修だより」も８７号になった。なかなか先生方に日常的に時間を割いてもらうわけにはいかないので，私はこの紙面を借りて，先生方と教育の話をしているつもりにさせてほしい。一方通行で，すべて伝わっているとはもちろん思っていない。自己満足かもしれないが，密かに思うだけではダメだから，書く作業で，**「行動をすることで知を力に変える」**ことを実践しているつもりである。

この「校長研修だより」で何を書くかというアイデアは「考えているとき」でなく，「書いている最中」に浮かぶ。実は，この**「考えるより行動の法則」**は，人が行うあらゆる領域の活動に当てはまると思う。

例えば・・・

私も 47 歳のとき民間の会社の経営研修で，営業も経験したが，完璧なセールストークができるようになるのは，初めに商品の内容的な知識は多少勉強するが，相手を目の前にしてのセールストークを数えきれないほど経験したからである。

ある製品が市場に受け入れられるのかどうかがわかるのは，市場調査によってではなく，製品を市場に出してみてからである。

音楽家は楽器の演奏方法を頭で考えるのではなく，実際に演奏しながらその楽器の名手になっていく。

私たち教師も単に指導書を読むことによってではなく，日々生徒と関りながら教育者としての能力を育んでいく。

それはどうしてか？　なぜなら先のことなどわからないからである。先行きを完全に予測できる人なんていないからである。もしかしたら，少し先のことはわかる時があるかもしれない。だが，その境界線の先を見たければ，その場にとどまるのでなく，行動を起こさないといけない。

私の教師生活での学級だより第 1 号のタイトルは**「一流の批評家でなく，三流の実践家であれ！」**だった。学級だよりなので，生徒に向けてえらそうに書いたのだろうが，自分に対しての言い訳的なことだったと思う。「今の俺にはこれしかないよな。失敗することも多いだろうし」という内心だった。しかし，あれから 35 年・・・そのマインドは今も何も変わらない（笑）。だから法則なんだろうと思う。

私たち教師の世界でも，すごく考え，思い悩む人はいる。そしてそこでストップしてしまうことがある。おそらくその先生の思考はこれ以上長く思い悩んでも 1 ミリも先に進まないポイントに達していると思う。このような**「思考の飽和点」**とでもいうような状態を長く続けると，行動が消極的になり，新たに得られる気づきはどんどん小さくなる。

私は，頭の中で考えることは，懐中電灯で照らす範囲と思うようにしている。**行動を起こせばサーチライトであたりを照らし出したかのように，一気にいろんなものが見えるようになると思っている。強い光は，ずっと先まで行き届く。**

なのに，なぜ考えすぎるのだろうか？

それは，考える方が楽で，行動する方が難しいからだと思う。その理由ははっきりしている。考えるだけならリスクはゼロで，行動すれば失敗や挫折のリスクはゼロではないからである。だが，口癖のようにいつも言うが，行動を起こしたら，その代わりに経験を手に入れることができる。

「望んでいたものを手に入れられなかった場合に，手に入れられるのは経験である」